

平成 27 年度 国際関係論専攻 調査研究助成金（秋学期申請分）
調査・研究報告書

受給者：B1566835 葉山 亜美

所属：上智大学グローバルスタディーズ研究科国際関係論専攻博士前期課程

研究課題：対馬における日韓海女の交流の軌跡

調査背景

申請者は春学期にグローバルスタディーズ研究科国際関係論専攻より、助成金を獲得した。この助成金を用い、韓国から来た海女たちと日本人海女間にどのような交流があったのかを探ることを目的に、9月に三重県の鳥羽市にてフィールド調査を行った。調査の主な内容は海女と海女文化保護活動関係者へのインタビュー調査、海女に関連する施設や神社、また漁港を調査することであった。フィールド調査の成果に関しては次項で詳しく述べる。本調査より海女の出稼ぎに関する多くの情報を得ることができたが、他の「国家」の海女の出稼ぎ先として、「外国人」を受け入れていた場所があることがわかった。対馬である。

対馬は日本と韓国の中間に位置する島である。その地理的条件から日韓の海女が集まる。日本から約 100 km、韓国から約 50 km の位置にある対馬は、海女文化に限らず、古くから日韓交流の窓口であったと考えられる。韓国側から経典や綿布が輸入されただけでなく、外交の拠点としても用いられ、日韓交流の影響を大きく受けている。

しかしながら言うまでもなく、海女は国家代表でもないし、国家の何がしかを体現しているわけでもない。近代に入り、国際関係は、いわゆる「近代国家」の諸特徴を前提として成立した。しかし、20 世紀にはいり、第一次大戦、第二次大戦さらには冷戦時代という、近代国家の頂点の時代に、海に潜るだけの生活者である海女が、それぞれ異なる国から、国境意識の希薄な場所で交流することの意味は、考えなければならない。以上のように本研究は対馬における韓国人海女と日本人海女の交流の軌跡を紐解くものである。

研究目的

本研究は、海女に焦点を当て、対馬をめぐる「国際交流」のあり方を理解することを目的とする。なぜ、海女を通じてこのような国際交流が開いたのか、なぜそれが何十年もの間続いたのか、その交流の結果、日韓それぞれの交流者にどのような影響があったのか、また日本と韓国の「現代国家」に、この交流はどのような意味合いを持ったかを問う。

①対馬における海女の交流はいかなるものであるのか②対馬における日韓交流の変遷と現状を明らかにしたいと考える。対馬での日韓交流から、現代国家に囚われない人の交流を観察することができるのではないかと考える。これらを明らかにすることが本研究の目的である。

調査日程・方法・内容

① 調査日程:3月2日～3月7日

3月2日:移動日・調査準備日

3月3日:対馬到着。海女の資料館の見学、曲の浦の散策、元寇のゆかりの地の訪問

3月4日:海女さんへのインタビュー、日韓交流事業推進者へのインタビュー

3月5日:韓国大邱からの観光客に同行し対馬観光

3月6日:民俗資料館の見学、図書館で資料探し

3月7日:移動日

② 方法・内容

海女さんや日韓交流事業推進者に対するインタビュー調査を実施。インタビュー時間は特に設けておらず、いずれも2時間以上と長い時間ご協力していただいた。海女さんに対する質問内容は出稼ぎの経験や歴史、海女文化の現状などである。一方日韓事業に関しては、とりわけ朝鮮通信使の歴史を利用した韓国人観光客の誘致の話を中心に伺った。本調査はインタビューのみならず、以下のことも加えて実施した。①海女に関する資料館、博物館の見学②海女が崇拝する神社への参拝③漁港の散策④韓国人観光客に同行した観光、である。これらを通じ、海女文化の歴史や地域との関係、現状だけでなく対馬における日韓交流の大枠を把握することを目的とした。また、常にコーディネーターの方の引率のもと本調査は行われた。

調査・研究報告

今回の調査では韓国を経由し、対馬へ入った。このルートをとった目的は①釜山から対馬へ実際どのくらいの人が訪れているのかの観察②海上の国境をこえる体験、の2点である。プサンにある国際ターミナルの利用者のほとんどが韓国人であり、日本人は見受けられなかった。乗客も同様、往路の際日本人は申請者のみであった。どのくらい韓国人が対馬へ訪れているのかを観察できたことは現在の対馬の状況を理解するうえで役立つものとなった。

対馬での調査の成果は2点挙げられる。第1に地元の海女にお話を伺えたことである。現役の海女のカツキ氏、すでに引退しているウメノ氏の二人から海女としてどのような生活をしている(してきた)のか聞き取り調査を行った。この調査を通じて、対馬の海女、とりわけ曲という土地にある独自の海女文化を持っているということを明らかにした。これは海女とその家族は船による海上生活を行っており、めったに陸に上がることが無かったことである。海女文化は、これまでの文献並びにフィールド調査を通じて、地域色が非常に強いことを理解していた。こうした地域に根付いた文化を対馬での調査においても同様に発見することができたことは重要な成果と考える。

第2に済州島との関係を捉えた点にある。海上生活という独自の海女文化をもっていた曲の海女の場合、韓国人海女との関わりは希薄であったらしい。しかしながら、彼女たちは実際に済州島から海女が来ていたことを覚えているだけではなく、現在でも対馬に済州島

出身の海女がいることを知っていた。本調査では濟州島出身の海女にお話をする機会がなかったが、濟州島出身の海女の存在を確認できたことは研究の方向性を再考するために役立つと考える。また 28 年度の夏季休暇期間を利用したフィールドワークではこの人にお話を伺うこと視野に入れた調査計画を思案したい。